

高崎学検定講座

2022年7月10日(日)高崎市城址公民館

7月23日(土)高崎市市民活動センター・ソシアス

埴輪は語る



若狭 徹
(明治大学文学部)

◆埴輪とは何か？

- 古墳時代（3世紀中頃～6世紀）に作られた素焼きの焼物で、古墳に並べられた。
- 円筒埴輪と形象埴輪がある。
- 円筒埴輪は、古墳を守る結界として発達。
- 形象埴輪は、家や道具、動物・人物をかたどったもの。



上：形象埴輪 下：円筒埴輪
高崎市教育委員会 ・神戸市教育委員会

埴輪は殉死の身代わりか？

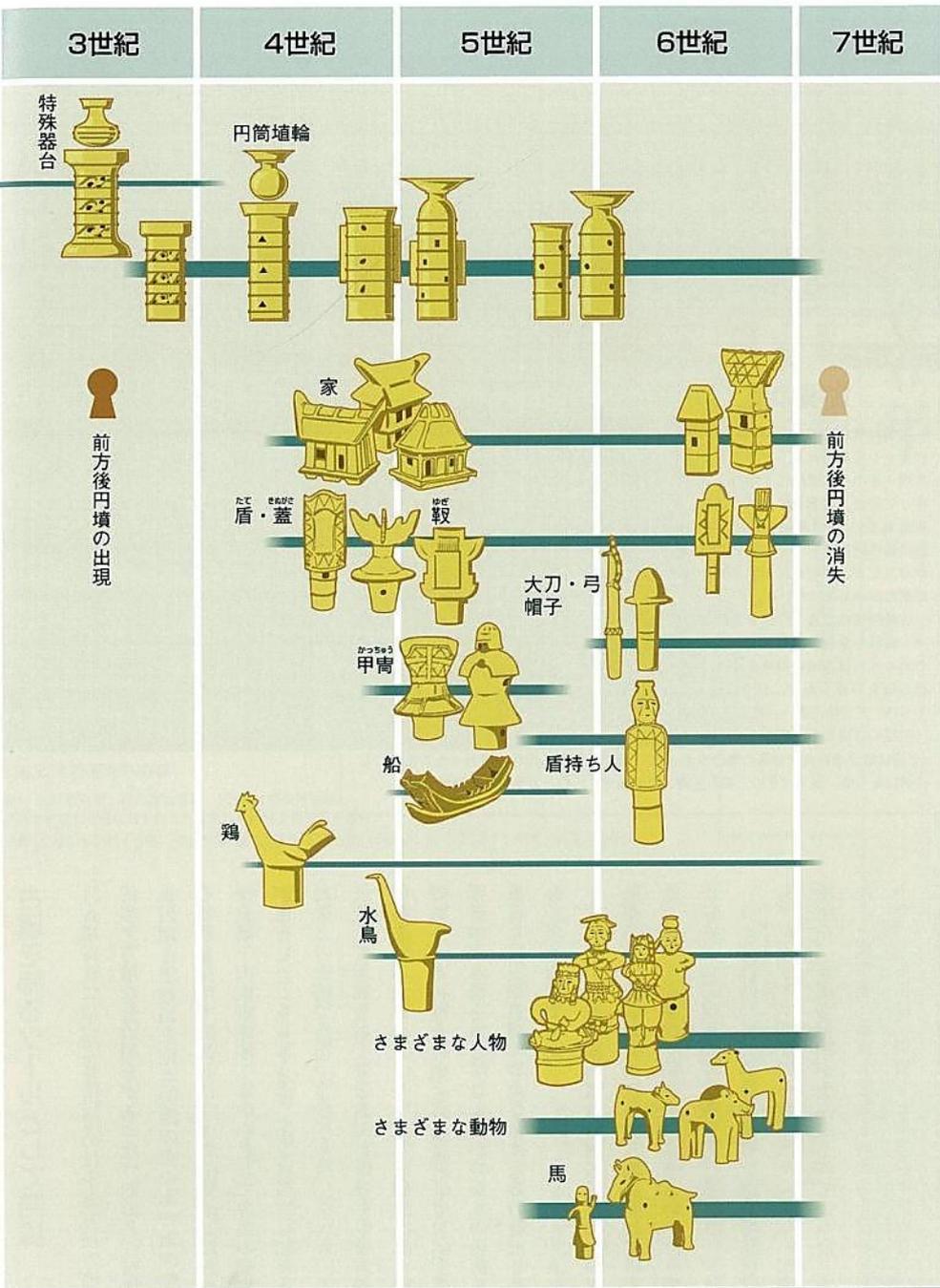
◆「日本書紀」にある埴輪の起源説話

- ・垂仁天皇は、弟（倭彦）の墓に生埋めにされた家来の悲惨さに心痛める。
- ・そこで、皇后（日葉酢媛）の葬儀に際し群臣に意見を求めたところ、野見宿祢が土部に人や馬をつくらせ奉った。これを「埴輪」・「立物」という。

◆しかし、実際には殉死の身代わり説は難しい

- ・埴輪の種類は、一斉にではなく、次第に出現する
- ・なかでも馬や人の埴輪は最後に登場する。
- ・「日本書紀」の伝承は、土師氏（古墳・埴輪づくり、天皇の葬礼を司る）の祖先を高めるための説話。

⇒埴輪消滅から百年後の「日本書紀」の編纂時（720年）には、埴輪の意味は既に忘れられていた。

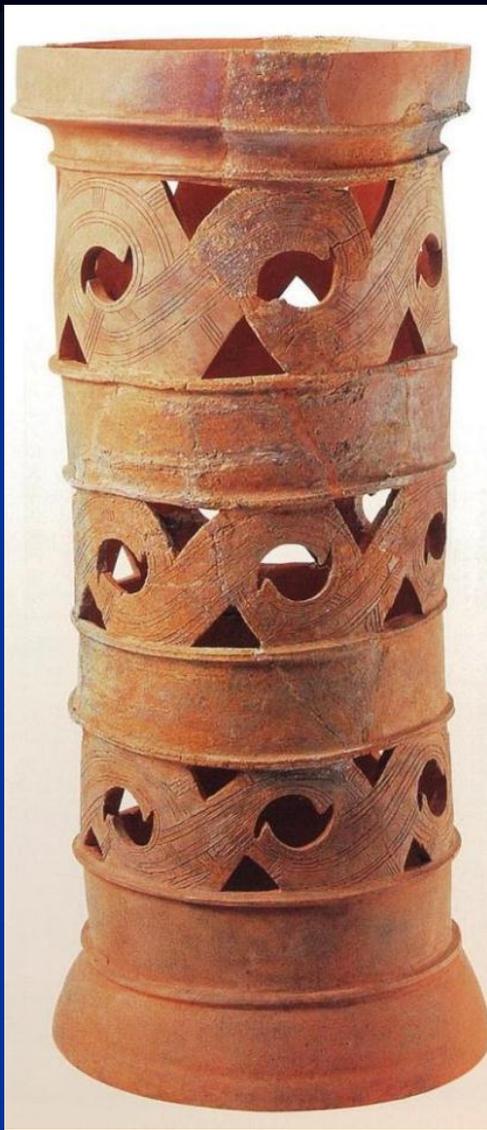


埴輪の移り変わり

- 円筒埴輪が最も早く出現
- 続いて家や器財埴輪が出現
- 最後に人物埴輪が登場
- 時期によって同じ種類でも型式の変化がある。
- ヤマト地域で常に新しい形式が出現し、地方へと展開。
- 全ての地域に埴輪があるわけではない。
- 6世紀後半になると西日本では衰退。
- かたや東日本では製作が盛んになる。

埴輪の出現 3世紀中頃

- ヤマト地域(奈良・大阪)で巨大前方後円墳が誕生。古墳時代がはじまった。
- 初期の古墳では、頂上に、特殊器台とその省略形である円筒埴輪を並べた。
- 以後、7世紀初めまで、前方後円墳と埴輪はつくり続けられた。



・左:特殊器台(橿原市弁天山古墳)

・右:箸墓古墳(桜井市)

橿原考古学研究所附属博物館



円筒埴輪の成立 3世紀中頃



4世紀～5世紀
朝顔形埴輪 上●6
と円筒埴輪 下●7
兵庫県神戸市 五
色塚古墳 高さ上
147cm・下 108cm
神戸市教育委員会



3世紀後半



壺形埴輪と円筒埴輪
●5 京都府向日市 元稻
荷古墳 総高103cm 京
都大学考古学研究室保管

弥生時代後期末頃



特殊壺と特殊器台
●4 岡山県新見市 西江遺
跡 器台：高さ85cm 岡山
県古代吉備文化財センター

弥生時代後期



壺と器台
●3 兵庫県赤穂市 有年原・
田中遺跡1号墓 総高80cm
赤穂市教育委員会

- ① 土器を置く台が太く発達し、弧帯文が描かれる。
- ② 文様が変化し、完全な筒形の形式が現れる。
- ③ 壺と器台を合体させた新形式が出現する。

円筒埴輪の誕生と多様化

- 弥生時代の器台+壺がしだいに豪華に
- 器の機能が失われ、大きな筒をたくさん置くことに主眼がうつる＝円筒埴輪の成立

円筒埴輪を並べる

4世紀初頭～



上：長野県森将軍塚古墳(4世紀後半)、右：奈良県メスリ山古墳埴輪配列(4世紀初頭) 榎原考古学研究所作図、下：奈良県ナガレ山古墳(5世紀前半)

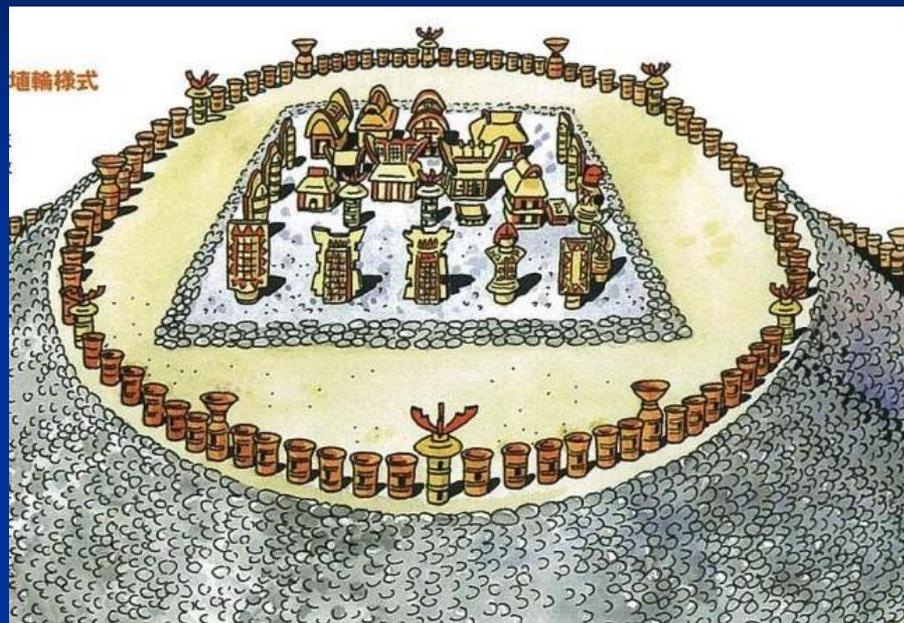
- 遺体を埋めた頂上を円筒埴輪で囲んで守るスタイルが登場。
- 以後、頂上や墳丘のテラスを列状に囲む。
- 古墳時代中期(5世紀)の巨大前方後円墳では、濠の外にも埴輪が並べられ、その数は万単位。



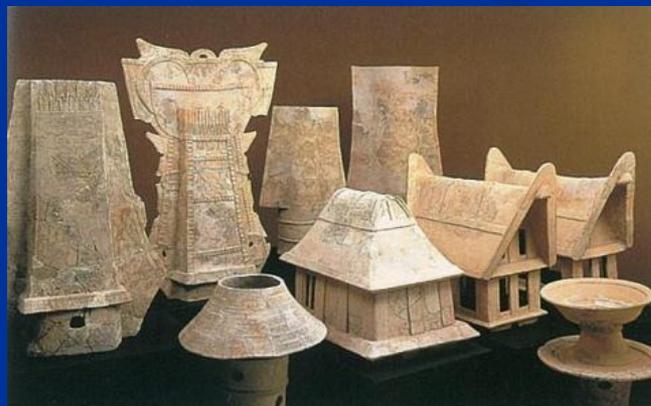
形象埴輪の登場

墳頂部の家と器財

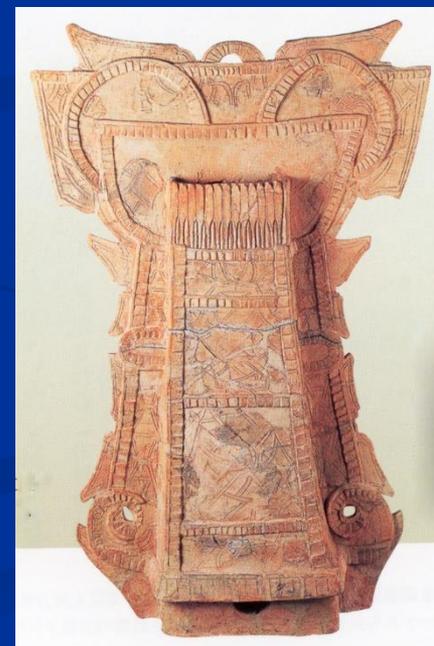
- 4世紀中頃、ヤマトの佐紀古墳群などで形象埴輪が誕生。
- 埋葬施設の上部に、家・蓋（きぬがさ）・盾・鞆などを配置。
- 死者の居場所を示し、その場を権威づけ、守る存在。



蓋：佐紀陵山古墳



奈良県室宮山古墳の埴輪





墳頂部の埴輪群(群馬県伊勢崎市赤堀茶臼山古墳)

59m 東京国立博物館

●豪族の居館を様式化した家形埴輪群
(平地式で切妻造の大型・小型、高床式で
切妻造、高床式で寄棟造、囲み形)

●王の存在を示唆する椅子形埴輪

●王の政治の時間を表す鶏形埴輪

古墳裾(造り出し)の埴輪群が出現



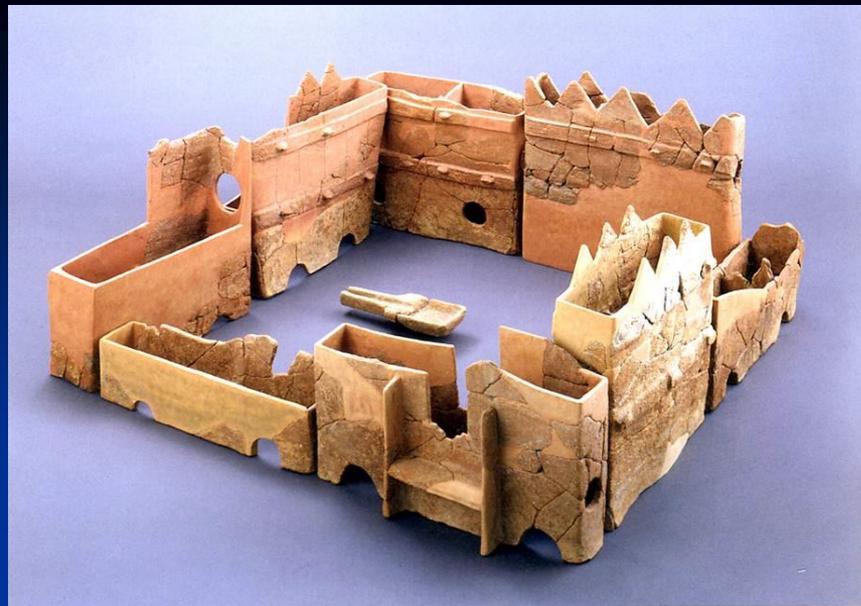
- 4世紀後半～末頃、墳丘の裾に造り出しが設けられる。
- そこに家を中心とした埴輪群が並べられる。



奈良県天理市赤土山古墳



水をまつる建物¹⁰

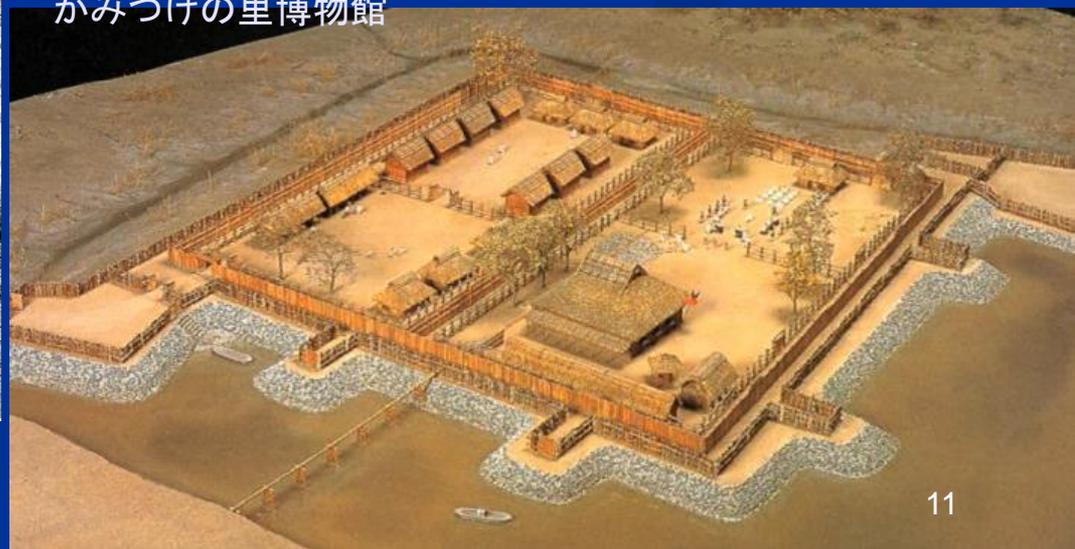


大阪府藤井寺市狼塚
古墳の導水施設埴輪
藤井寺市教育委員会

水利を統べる王 (水まつりの施設とその埴輪)



豪族居館 群馬県三ツ寺 I 遺跡
かみつけの里博物館



導水祭祀遺構 奈良県南郷大東遺跡
檀原考古学研究所

白鳥の世界

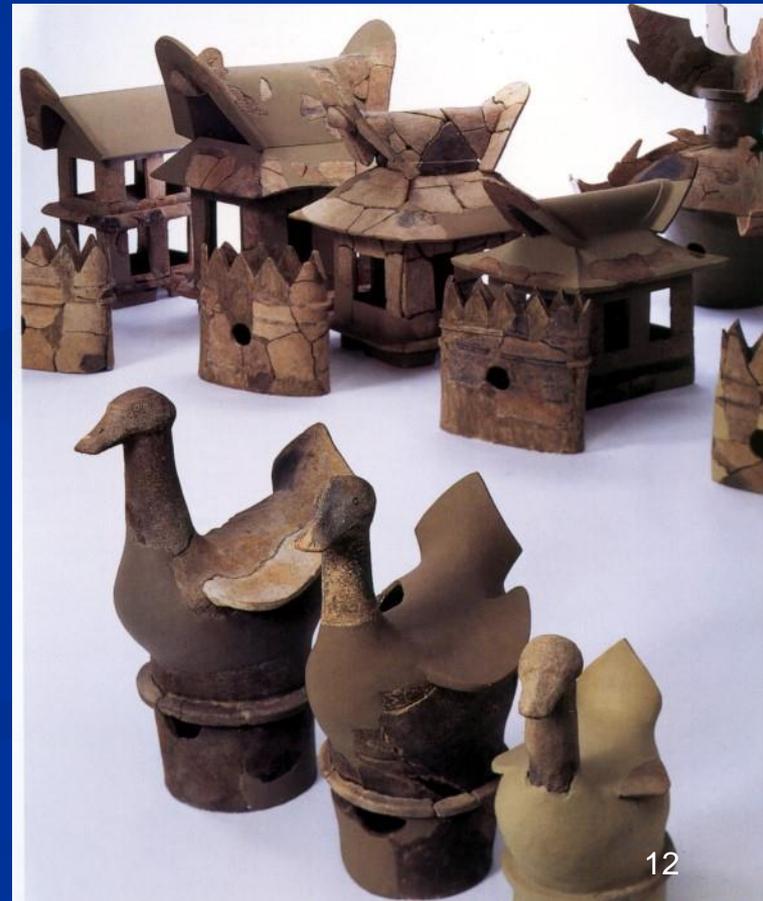
- 4世紀末に出現。造り出しや中島(濠の中の浮島状の施設)に置かれる。
- ヤマトタケルの白鳥伝説。
- 清浄な居館周辺の景観。
- 周濠の整備によって、墳丘(被葬者の世界)と現実世界をつなぐ中間地帯(造出)が創出された。



大阪府藤井寺市・津堂城山古墳出土 藤井寺市教育委員会



奈良県広陵町巢山古墳の造り出し(出島)と埴輪群 広陵町教育委員会





王者の船 三重県宝塚1号墳

松阪市教育委員会

倭装大刀・儀仗・蓋を飾った王の外洋船。

海運を差配する伊勢の王

被葬者の葬送船

「隋書倭国伝」

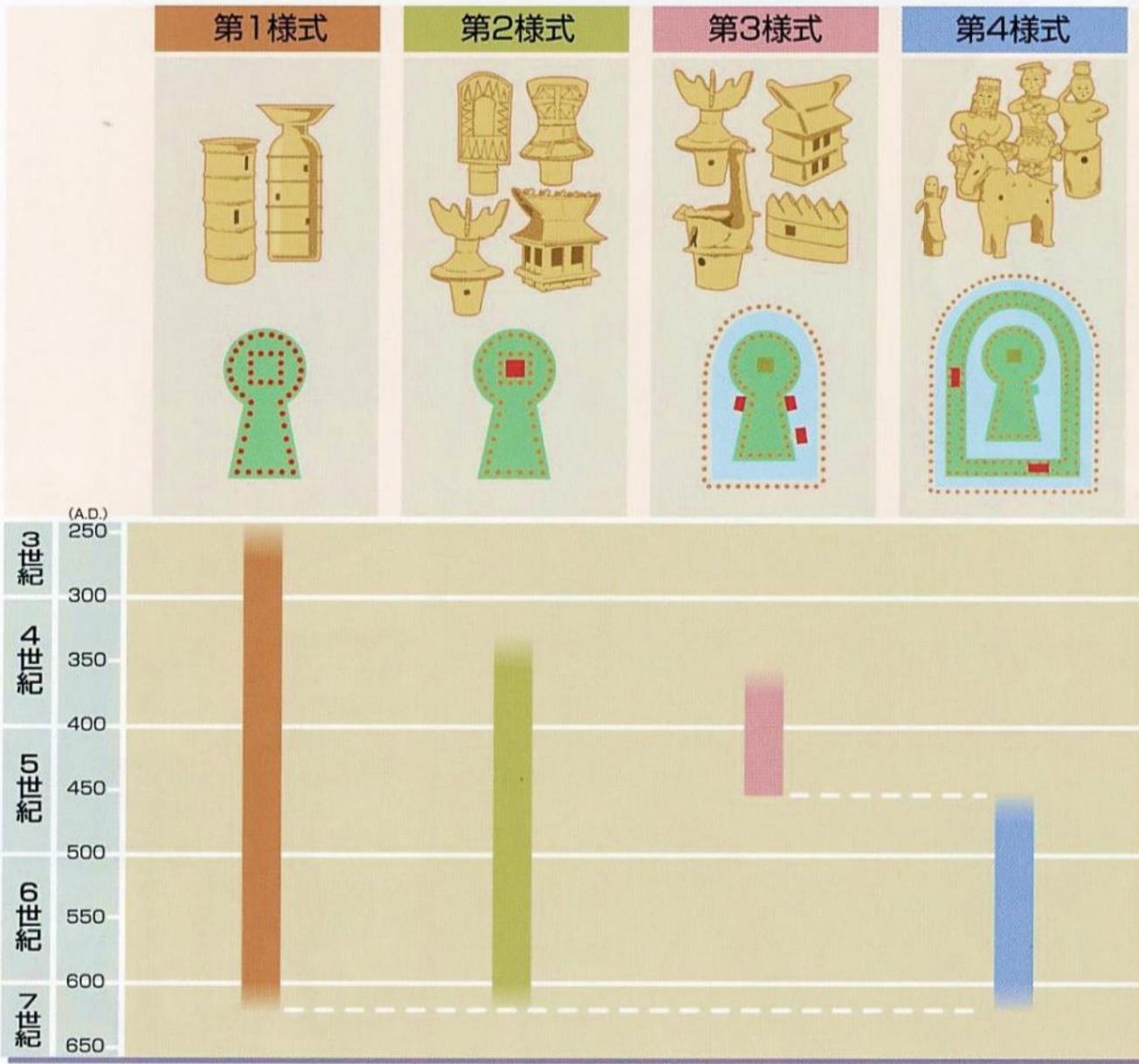
貴人は三年外に殞し…葬に及んで屍を船上に置き、陸地これを牽く



巢山古墳周濠出土の船

広陵町教育委員会

埴輪様式 (埴輪を立てる場) の変遷

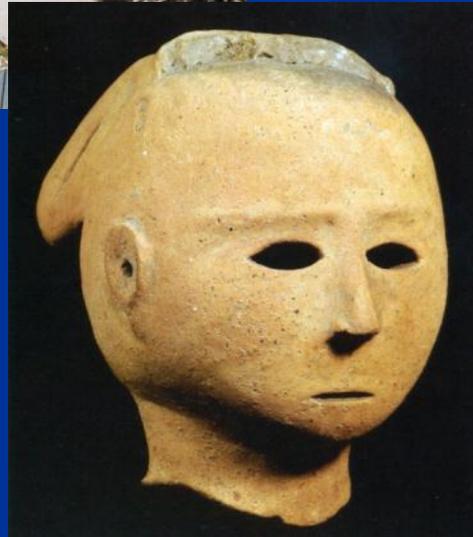
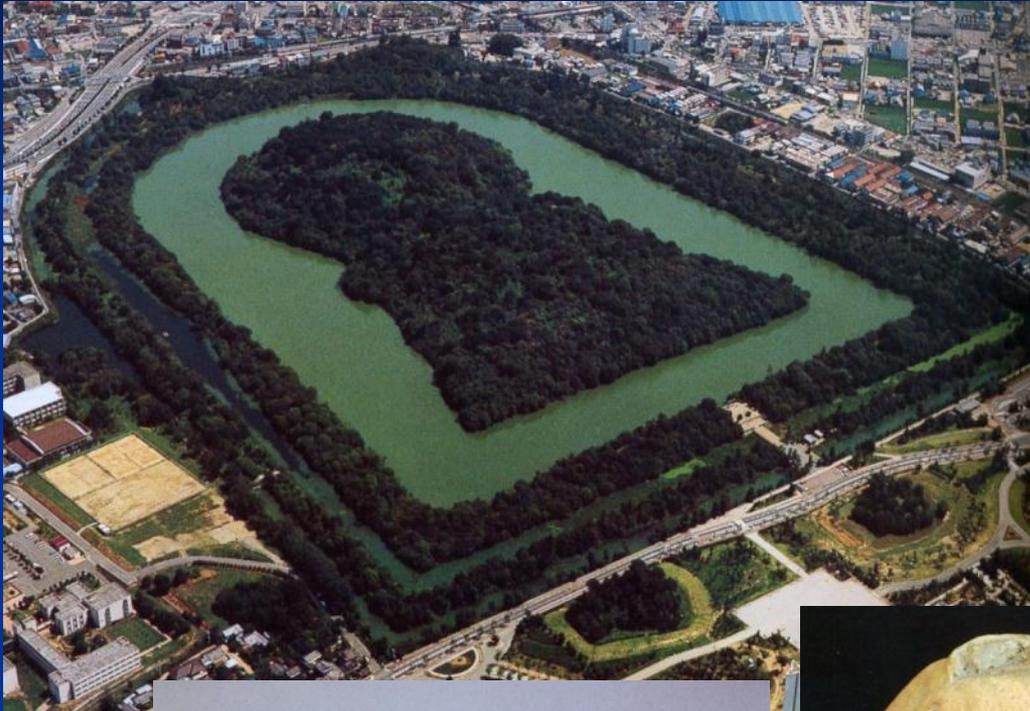


○古墳上の赤色は新しく埴輪が設置された場所。オレンジ色は設置済の場所。



人物埴輪あらわる

- 5世紀中頃の大仙陵古墳に人物埴輪が確実に存在。
- 画期的な大仙陵古墳の築造(もしくは一つ前の誉田御廟山古墳)をきっかけにして、創案された。
- 出現時から群像として成立した可能性が高い。



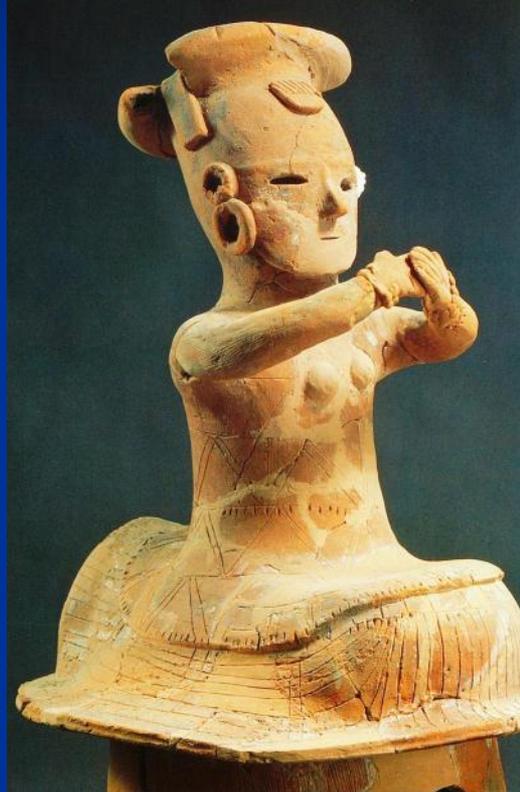
仁徳陵古墳と出土埴輪
宮内庁書陵部

様々な人物埴輪たち1



首長

巫女



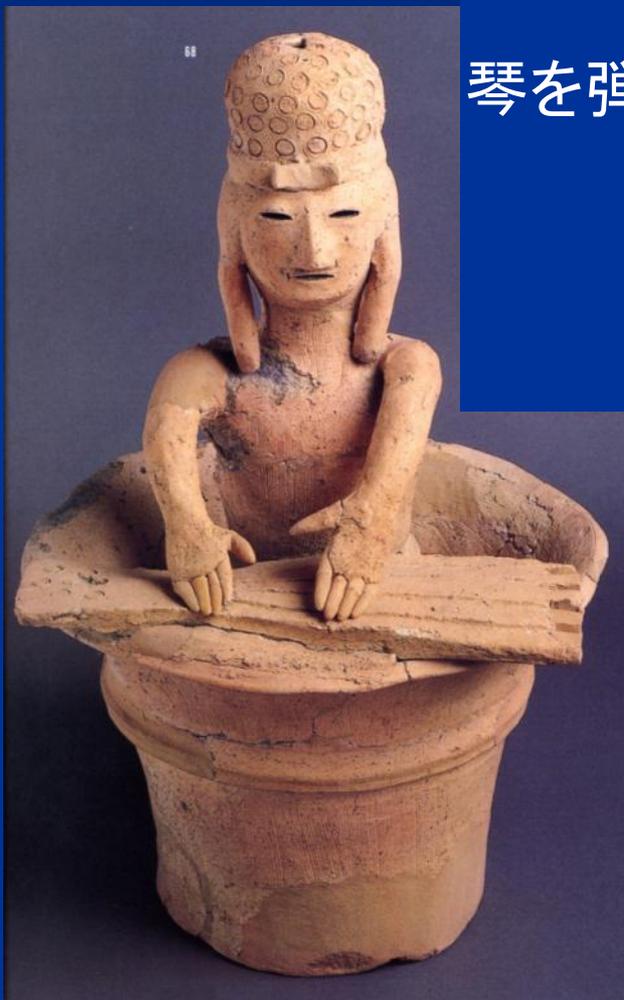
左上・右：八幡塚、左下：八幡原、中：観音山(いずれも群馬県)

様々な人物埴輪たち2

鷹狩りする男

盛装の男

琴を弾く人



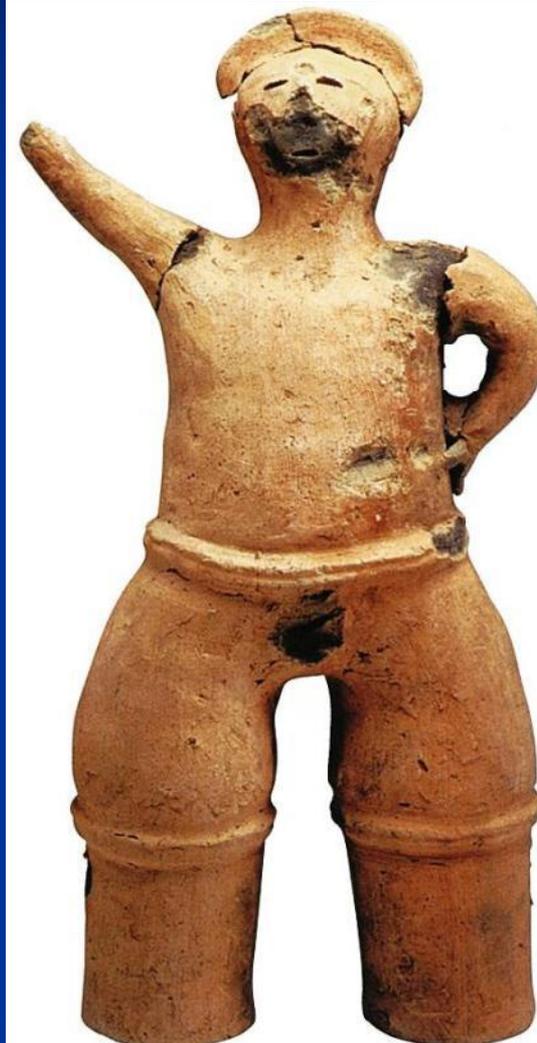
左:原山1号(福島)、中:オクマン山(群馬)、右:伝群馬

様々な人物埴輪たち3

渡来人



力士



武人



左:山倉1号(千葉)、中:原山1号(福島)、右:今城塚(大阪)

人物埴輪群像の意味をさぐる



高崎市綿貫観音山古墳の埴輪群像（一部）

- ①神の声を聴きマツリゴトを行う王、
- ②王に対面し神の意志を伝える巫女、
- ③巫女に仕える女、
- ④鳴弦の儀で神を呼ぶ三人の女

高崎市

保渡田八幡塚古墳 の埴輪群像

- 人物埴輪は、単体ではなく、ストーリー性がある群像として作られた。
- 保渡田八幡塚古墳(5世紀後半)を通じて、人物埴輪のあり方を推定できる。



復元整備された保渡田八幡塚古墳(高崎市・5世紀後半)

保渡田八幡塚古墳 (高崎市)

はにわの
並んだ場所



発掘調査時

整備後



- 史跡保渡田古墳群のひとつ。墳丘長96mで二重濠をもつ5世紀後半の前方後円墳。
- 埴輪群像が昭和初期に発見され、埴輪研究で有名な古墳。

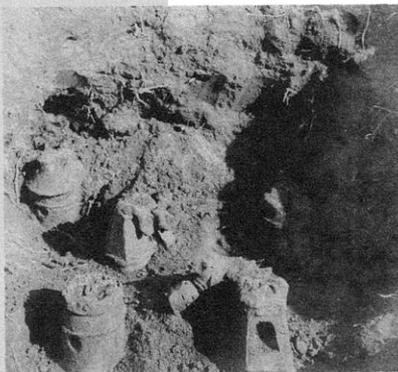
昭和4年(1929) 八幡塚古墳調査



昭和4年発掘時の写真
(手前に壺や人物・後ろに馬列がみえる)



昭和4年発掘時の写真
(手前に二本足の人物連輪がある)



昭和4年発掘時の写真
(椅子に座った人物連輪)



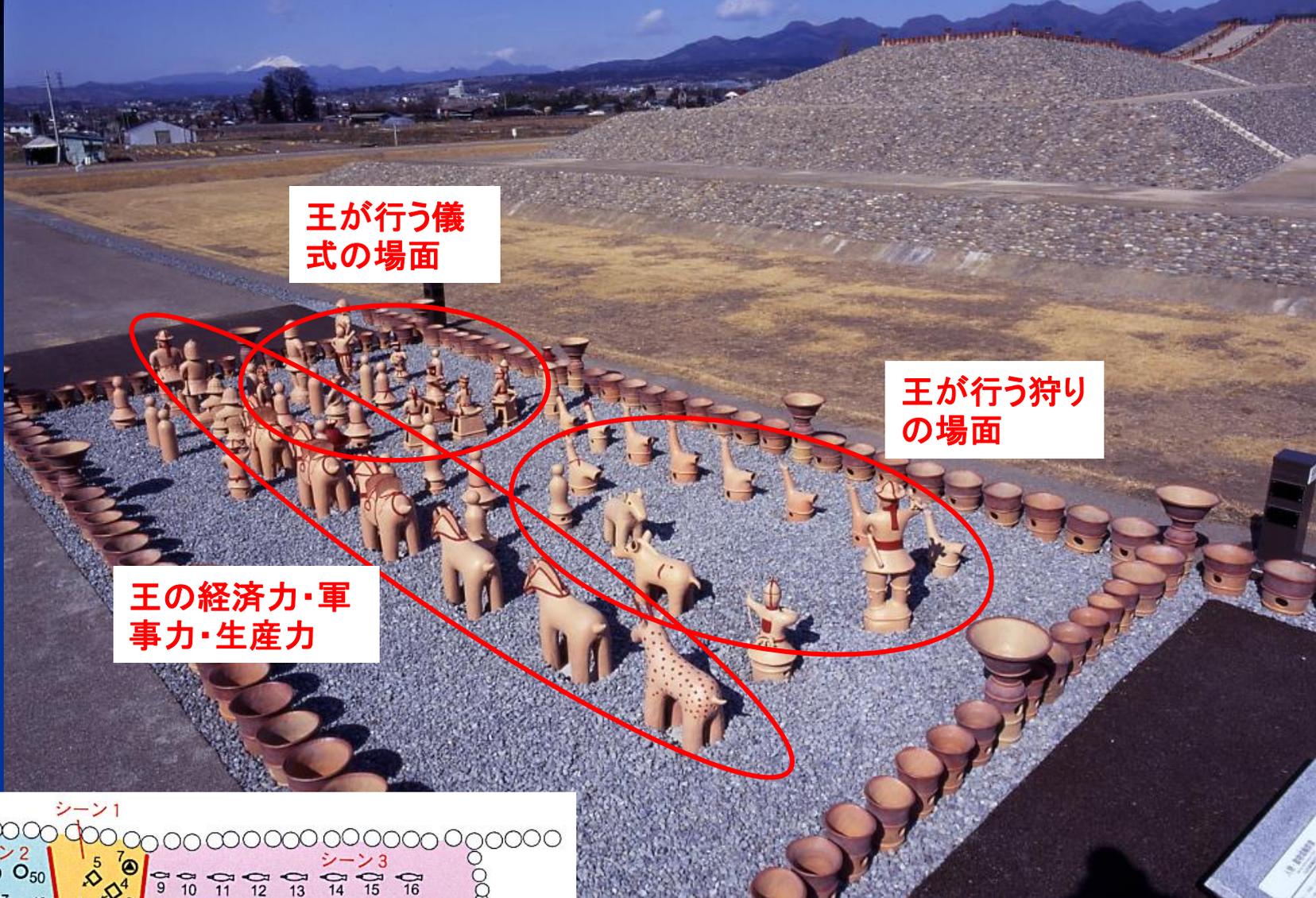
昭和4年に記録された人物連輪配列区A区の実測図

埴輪出土 位置図



形象埴輪配列区の 再調査状況(1994年)

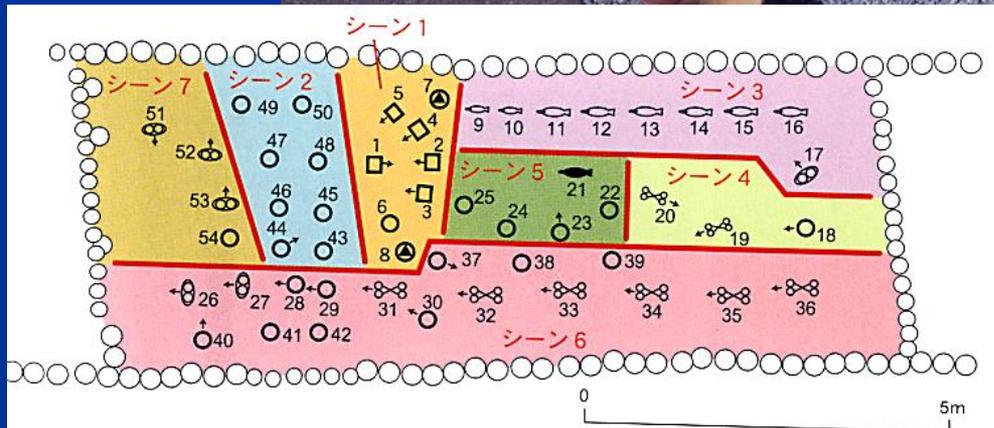




王が行う儀式の場面

王が行う狩りの場面

王の経済力・軍事力・生産力



人物埴輪群像のグルーピングと復元

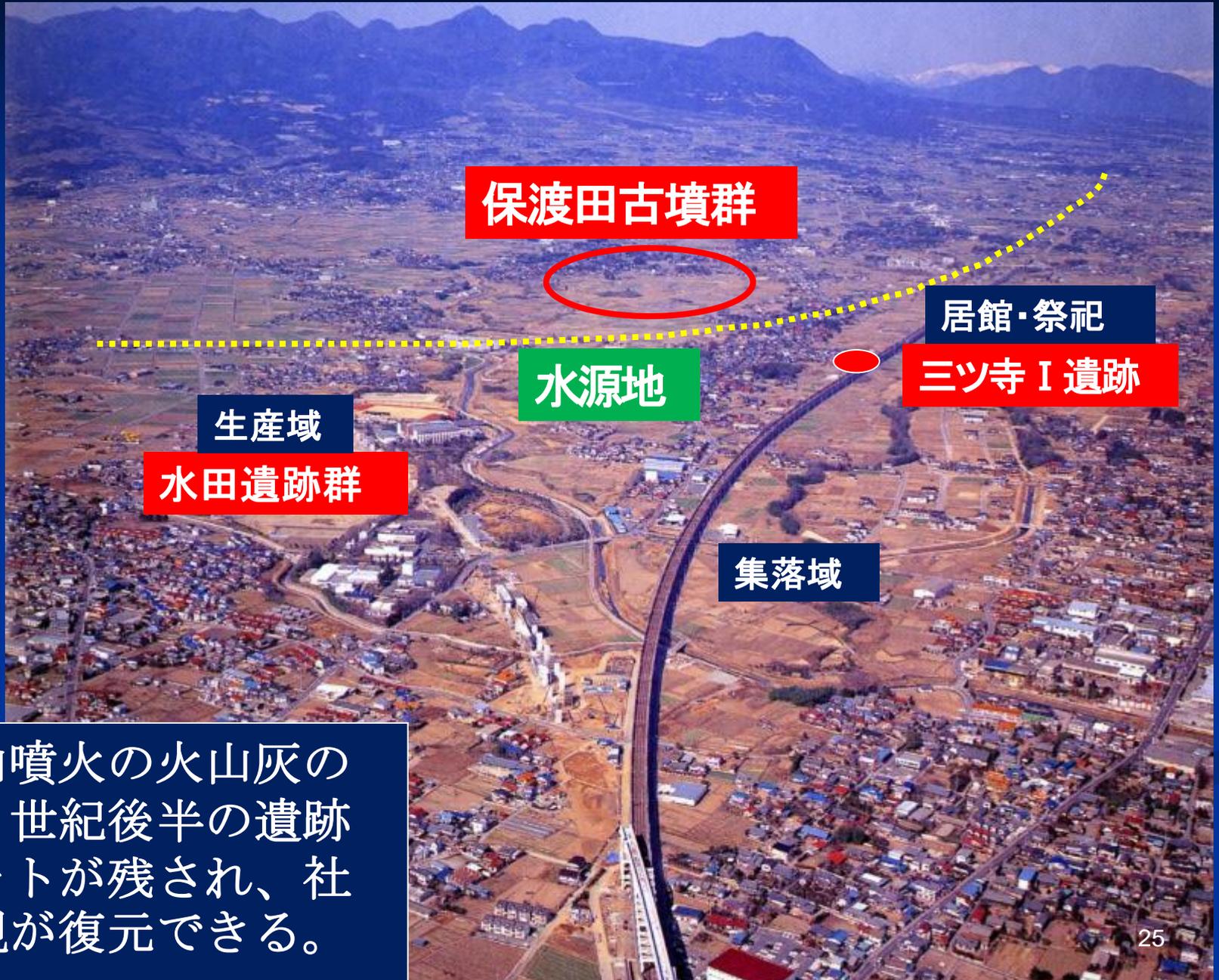
シーン1: 王の儀式の場面



- 王・巫女・重臣・弾琴き・壺からなる水の祭りの場面。
- この人物の組み合わせは、「古事記」の神占の場面に似る。
- 居館で行なわれた最も重要な儀礼の様子を埴輪に写したものであろう。



榛名山東南麓における5世紀の遺跡群構造



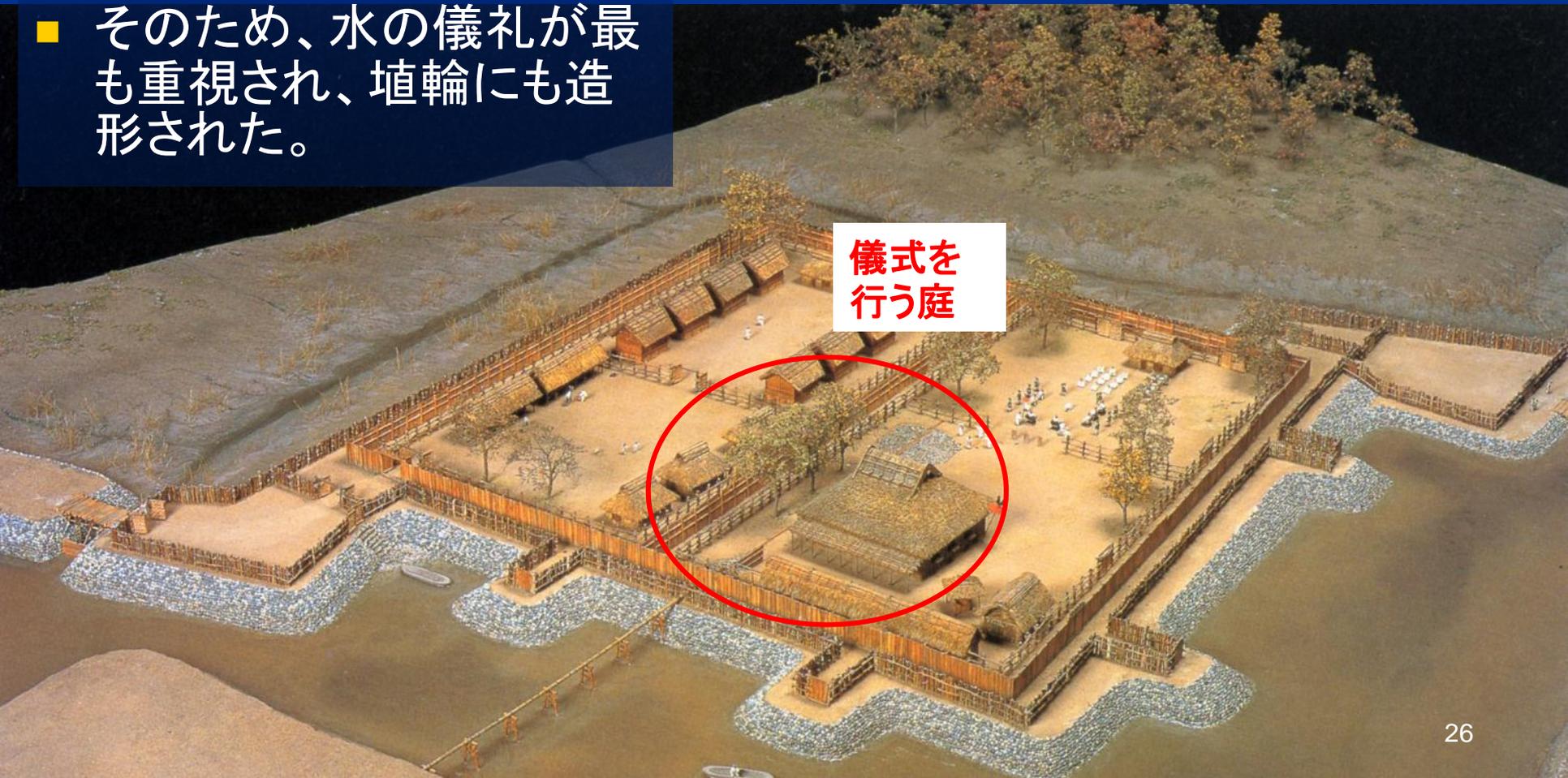
- 榛名山噴火の火山灰の下に5世紀後半の遺跡ユニットが残され、社会景観が復元できる。

三ツ寺 I 遺跡

(復元模型)

八幡塚古墳の主の生前の居館
古墳から1キロ南東に存在

- 首長の居館では、水の儀礼の施設が充実している。
- 居館は湧水を管理し、水利権を押さえた地域の農業経営拠点でもあった。
- そのため、水の儀礼が最も重視され、埴輪にも造形された。



豪族による用水の高度運用

水源掌握→築堤・貯水地・大水路開削・掛樋 →農地改良→小区画水田



芦田貝戸遺跡

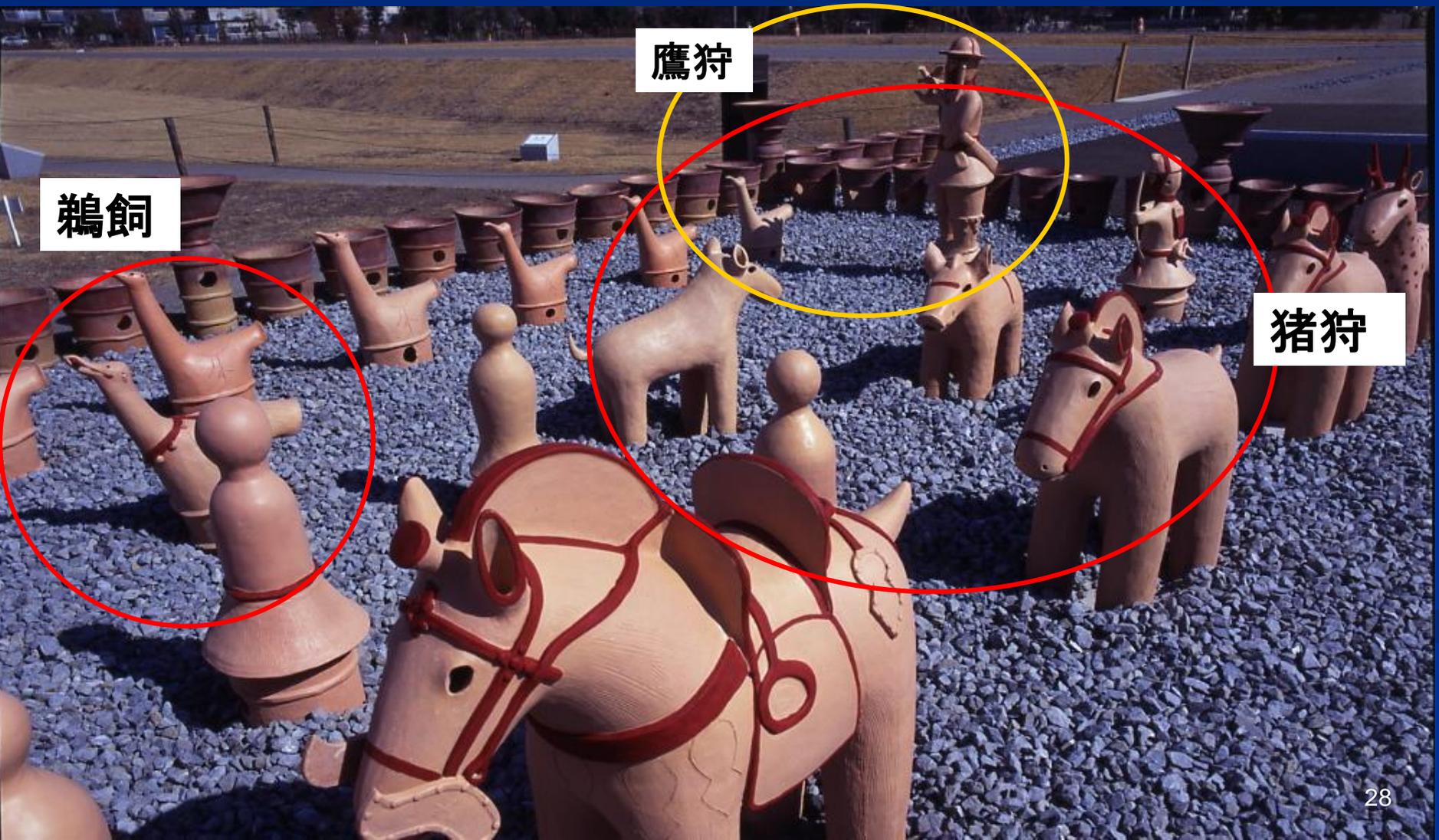


水田遺構(御布呂遺跡)

シーン3・4・5

狩猟場面(鷹狩・猪狩・鶉飼)

- 三界(水・空・地)の物を我が物とする王者の狩猟。



鶉飼

鷹狩

猪狩

魚

鈴付の首輪



鶺鴒の埴輪

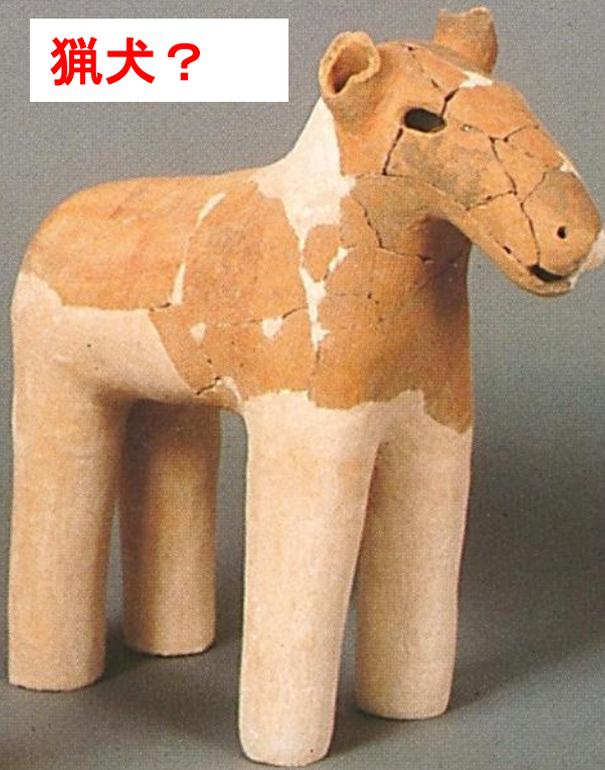
- 「隋書倭国伝」に、倭で鶺鴒が盛んであったことが記される。
- 「日本書紀」に、豪族が相手を鶺鴒にさそってだまし討ちにする場面がある。
- 首長の権威的な催しとして鶺鴒が行われた。



弓を引く狩人



獵犬？



猪狩り場面

倒される猪



高崎市保渡田Ⅶ遺跡出土



- 日本書紀には、雄略天皇が荒ぶる猪を打ち倒す様が記される。
- 猪狩りは王の儀礼
- 埴輪に広く様式化されている。

鷹狩り場面



- 古墳時代に伝来した新しい狩猟法
- 鷹を飼いならし、飢餓状態に調整して行う贅沢な競技。
- 人物の衣装は王の装い。
- 王が行う鷹狩りを表す。

シーン6・7

王の武威・財物・経済

- 武威を占めす武人や力士の群像
- 王の所有する馬・服飾・甲冑などの先進的な財物と経済行為



盛装した男



- ・最先端のファッション。
- ・高級服飾を入手できる経済力。
- ・盛装して儀礼を行った政治力

武装した王

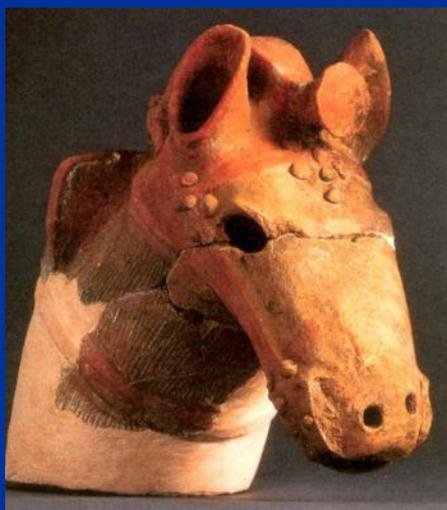
- ・最高級の武具(小札甲)で武装した王の姿。
- ・外征した王の武威

＝埴輪には、場面が異なる複数の王の姿が表現されている。



馬の埴輪

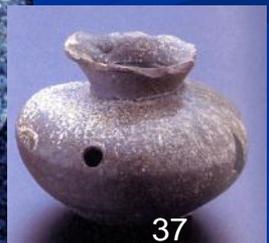
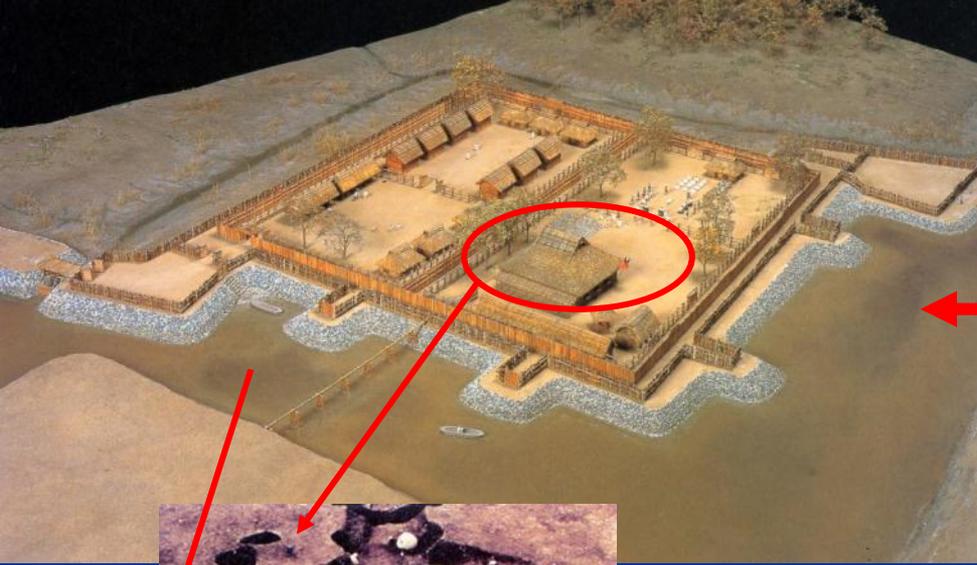
- 馬は5世紀に朝鮮半島から導入され、計画的に生産された。
- 渡来人技師を招聘して推進された先進産業だった。
- 馬の導入は、人力から畜力への動力革命。
- 軍事・運搬・農耕・情報伝達が革新される。
- 馬を生産・所有する豪族の財力を埴輪で誇示。



古墳時代社会における人物埴輪の意味

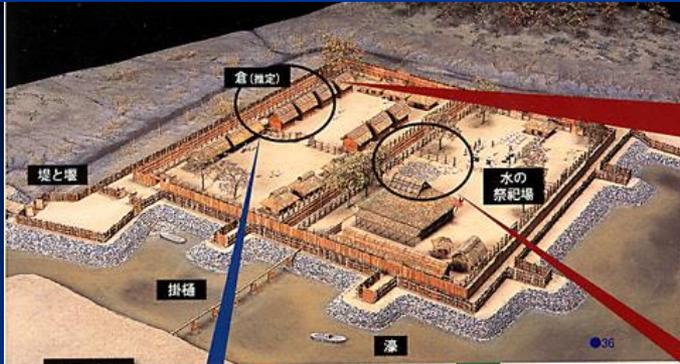


- 埴輪は、群像として作られ、ストーリーをもった複数の場面として並べられた。
- 当時、古墳に訪れた人々は、埴輪をみて、生前の偉大な王の姿を偲んだと思われる。
- 人物埴輪群像は、神をまつて集団に安寧をもたらし、財物を集積して集団に富をもたらす王の姿を象徴したもの。
- 人物埴輪は、首長のマツリゴトを共同体に認識させ、社会結集させる仕掛けであった。
- もっといえば、前方後円墳そのものが、社会システムを維持するための装置であった。



古墳時代社会と埴輪

地域開発・土木工事
水利経営・農業生産

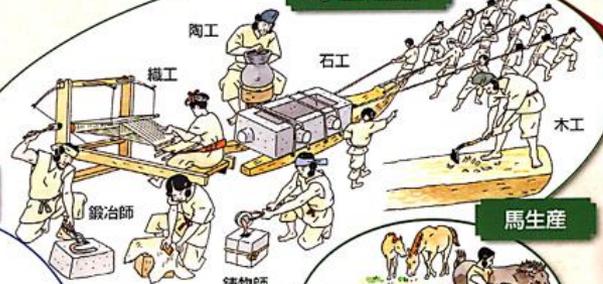


居館

(王の生前の拠点)



手工業生産



**外交・交易
流通・軍事**



馬生産



馬と馬具

富と財物(経済)



**祭祀と儀礼
(マツリゴト)**



前方後円墳

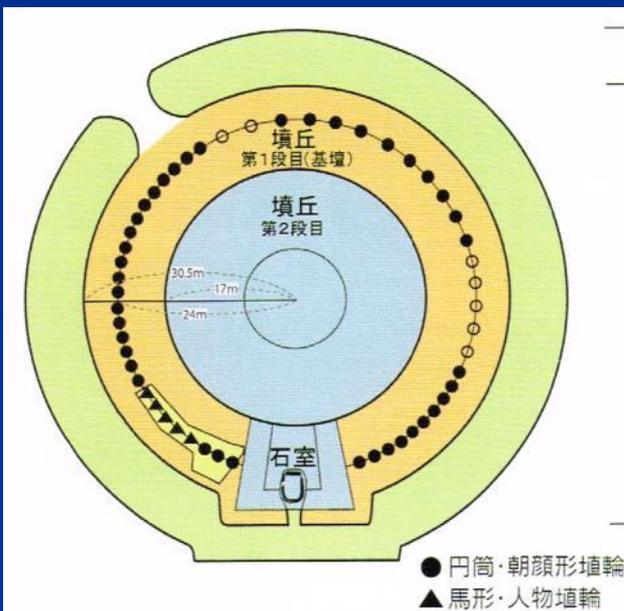
(王の死後の住みか)



埴輪とジェンダー

女性が主役の埴輪群像

栃木県下野市甲塚古墳



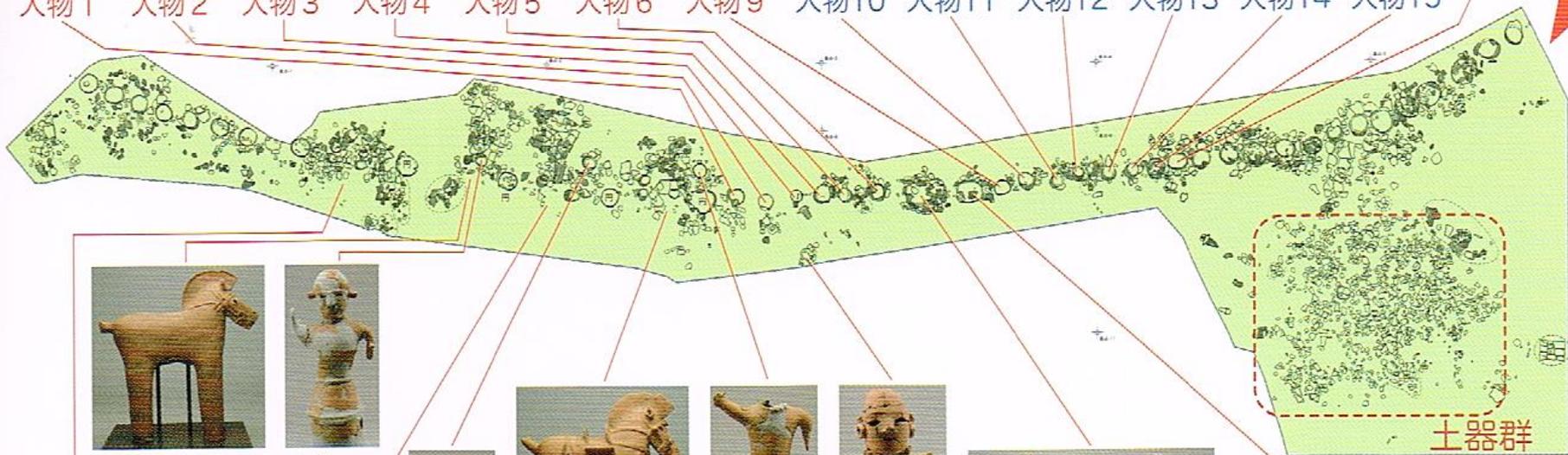
・墳長60mの帆立貝形古墳。6世紀後半。

・横穴式石室の左側のテラスに人物埴輪群像を配列。





人物1 人物2 人物3 人物4 人物5 人物6 人物9 人物10 人物11 人物12 人物13 人物14 人物15 人物16



馬形3



人物19



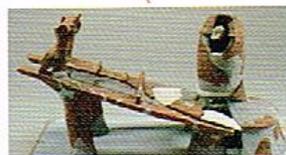
馬形1



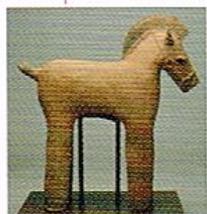
人物17



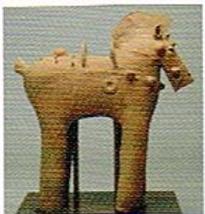
盾持ち人



人物7



馬形4



馬形2



人物18



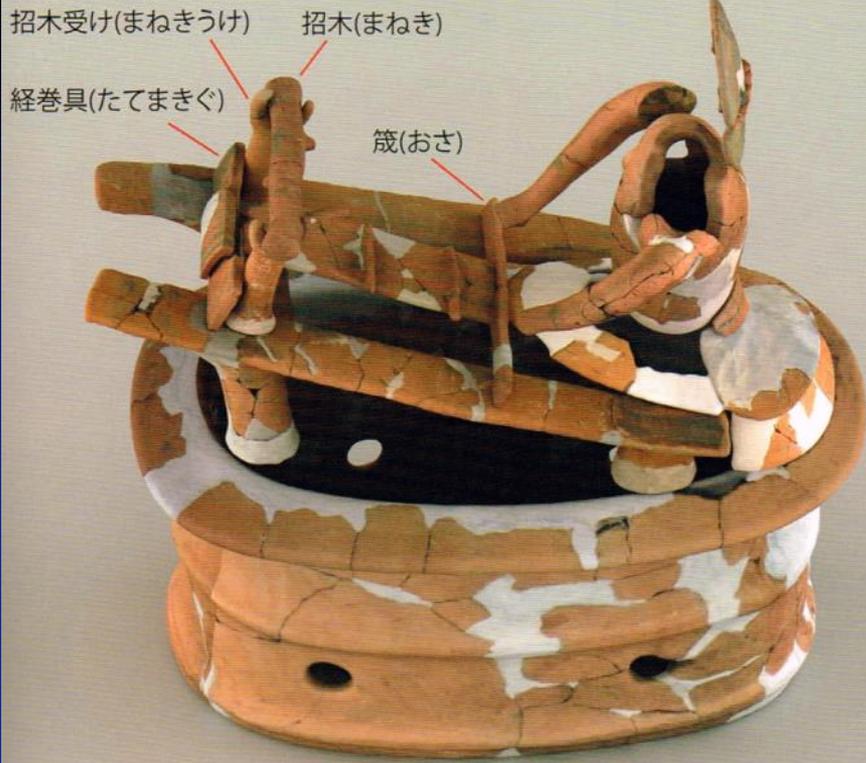
人物8

赤文字 = 女性 青文字 = 男性

0 2m

機織りする女子

群像の中心となる埴輪は、女子が地機で、布を織る様を造形



人物埴輪7 (機織形埴輪：地機) こちらを外側にして古墳に設置されていました。

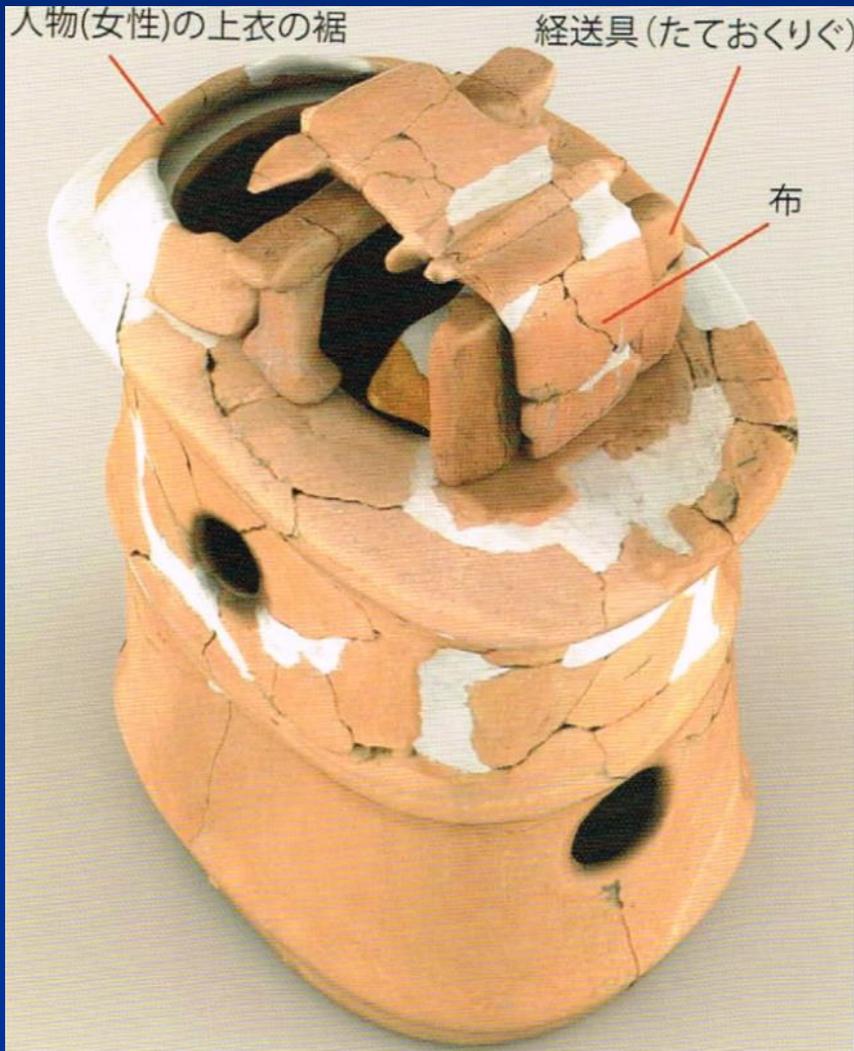


機織りする女子2

- ・原始機で布を織る女子も出土
- ・人物埴輪19体のうち、女子が9体(47%)
- ・これほどの女性比高さは異例。

・この古墳の主が女性であり、生前に布生産を司ったことを象徴。

・布生産は東国の主力産業のひとつ(例:上総の望陀布〔超高級麻布・大嘗祭に使用〕)





女子が乗る馬

- 人物列の左方に、馬の列(4体)があるが、先頭の最も立派な馬の鞍にはステップの表現がある
- 女子が鞍に横座りする為の装備。
- 最も立派な馬が、女子の所有物であることを明示。
- 機織り埴輪と合わせてこの古墳の主が女性であることを補強する材料となる。

埴輪のサイズと男と女

高崎市諏訪山古墳

- ・埴輪のランクは大きさを表示。
- ・この古墳の埴輪は女が大きい。
- ・この古墳の主は、女性族长か？



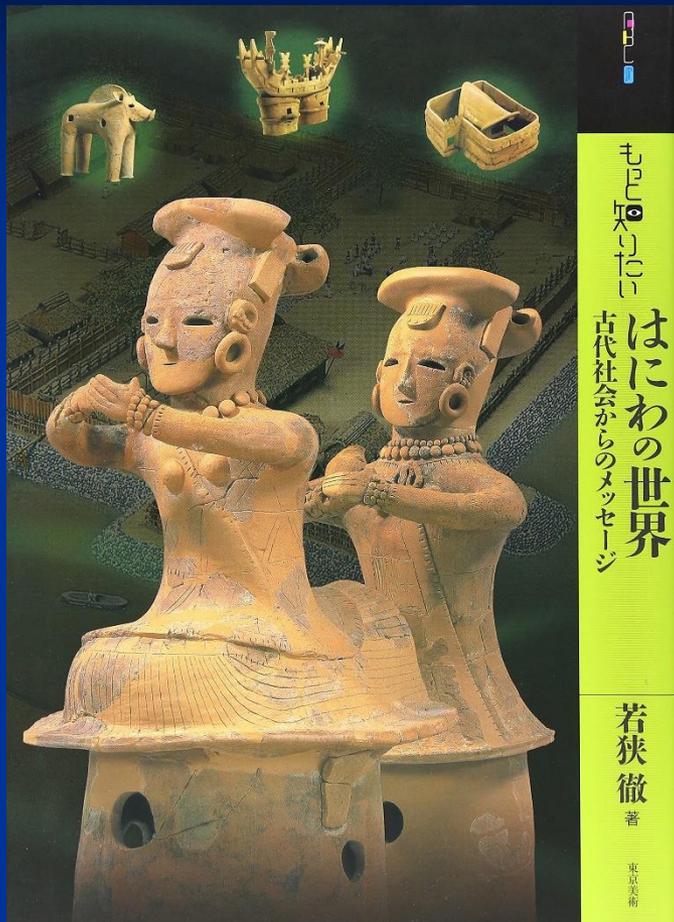
高崎市諏訪山古墳・6世紀前半



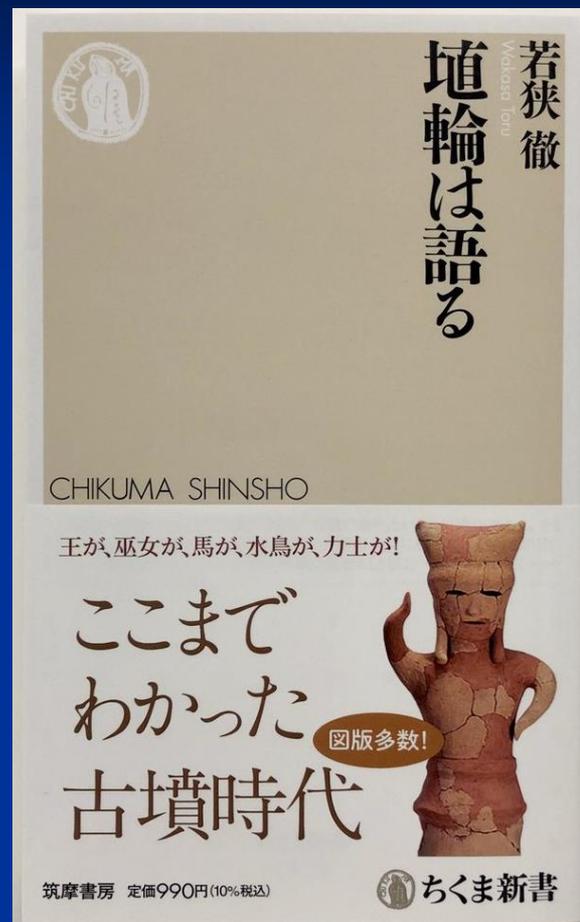
人物埴輪の終焉



- 5世紀前半に出現し、5世紀後半に各地で採用され、6世紀前半の今城塚古墳でピークを迎える。
- 6世紀後半以後は、関東(群馬・埼玉北部・栃木西部・茨城・千葉西部)で隆盛し、地域色も表れる。特に群馬に優品が多い
- 6世紀後半になると、群像は物語性を失い、形骸化。
- 前方後円墳は豪族連合であったヤマト王権の象徴。国家成立に向けて官僚化や制度整備が進むと前方後円墳は無用に。
- 7世紀初頭(推古朝頃)に前方後円墳終焉とともに埴輪も終焉



『もっと知りたいはにわの世界』
東京美術



『埴輪は語る』 ちくま新書
筑摩書房